
ランチョンセミナー

インフルエンザとインフルエンザワクチン（抄録）

神 谷 齋

国立病院機構 三重病院長

インフルエンザウイルスはRNA ウイルスで大きな流行を起こし、臨床的に問題となるのは、A型とB型インフルエンザである。インフルエンザの人への感染はHA（Hemoagglutinin）が気道の細胞レセプターに結合して感染が始まる。よくご承知のようにやっと日本国民もインフルエンザが単なる感冒ではなく、生命に関わる疾患であることを認識するようになった。現在2001年から高齢者に対するインフルエンザワクチン接種が予防接種法に基づいて一部公費負担で実施されている。日本はインフルエンザの診断と治療はまさに世界のトップレベルであるが、ワクチンによる予防は先進国の中では遅れをとっている。

しかしインフルエンザ対策の基本はやはりワクチン接種である。ワクチン接種が十分に実施されずにワクチンによる集団免疫効果がなければ、おそらく毎年、多数のインフルエンザ患者が病院に押し寄せ、中耳炎等の合併症もさらに増えることになるであろう。

最近数年間で日本のインフルエンザの診断・治療は急速に進歩した。インフルエンザ迅速診断は病院や医院での冬のルーチン検査となっている。治療薬（ノイラミニダーゼ阻害剤）も世界の生産量の60%以上が日本に輸入され迅速診断を実施しノイラミニダーゼ阻害剤で治療するという理想的な診療体制が確立されている。

本講演ではインフルエンザウイルスの特徴、不活性化インフルエンザワクチンの有効性（高齢者、乳幼児）、今後の方向性、診断薬、治療薬の現状等についてお話しする予定である。